

デューイの芸術論と宗教論の特徴と経験としての共通性

西園 芳信

デューイは、1934年に芸術論となる『経験としての芸術』(“*Art as Experience*”)と宗教論となる『誰でも信仰』(“*A Common Faith*”)の著書を出版している¹。本発表では、この芸術論と宗教論の経験の特徴を捉え、最後に宗教論と芸術論の経験としての共通性を述べる。

I 芸術的経験と「宗教的なもの」の経験における源

デューイの哲学は「自然主義的経験」(naturalistic empiricism)で²、その哲学の立場は自然と精神とは連続しているという「一元論」である。デューイが捉える「自然」とは、我々が日常経験において触れ経験しているところのものを言う。しかもこの日常経験は、質(quality)に満ちており美的質・宗教的質を含めあらゆる意味の源となる。この日常経験の中で芸術的経験は、音・色・味・匂い等の感覚的質(sensory quality)を対象とし、この感覚的質を素材とした芸術的表現によって美的経験が得られるものを創るものである。そして、デューイが宗教論で主張する「宗教的なもの」は、科学的経験・芸術的経験・道徳的経験にも伴うもので、人間が環境との間に良い適応関係をつくる際の態度を意味する。

II 芸術的経験の特徴

デューイ芸術論の目的は、芸術と日常経験は連続しており、その発展したものとする新たな芸術哲学を打ち立てることであった。デューイは、芸術論において日常経験が発展する芸術の姿を「経験」(experience)の概念によって展開している。経験とは、生物と環境との相互作用である。

Yoshinobu Nishizono (鳴門教育大学名誉教授、日本デューイ学会理事)

本論文は第1回世界市民教育シンポジウム「学びを生活に取り戻す——世界市民とジョン・デューイ」(2022年10月22日、於・創価大学)のセッション「デューイの思想形成——日本のデューイ研究の視点から」における発表原稿である。これは行安茂編著『デューイの思想形成と経験の成長過程』北樹出版、2022年の第3部第3章に掲載の拙稿「デューイの芸術論と宗教論の特徴と経験としての特徴共通性」を基にしている。

¹ J. Dewey, *Art as Experience*, Capricorn Books, 1934. J. Dewey, *A Common Faith*, New Haven: Yale University Press, 1934.

² J. Dewey, *Experience and Nature*, Dover Publications, 1929. p.1a. (帆足理一郎訳『経験と自然』春秋社、1959年、p.3.

生物が環境に働きかけ、環境から生物が影響を被ることである。この生物と環境との相互作用において順調に発展したものをデューイは「一つの経験」(an experience)と言う。「一つの経験」は、次のような特質による共通の構造がある。①経験に連続性 (continuity) がある。②経験に認識 (perception) が伴う。③経験が想像的 (imaginative) である。④経験に感情的質 (emotional quality) が伴う。日常経験は反省的思考 (reflective thinking) によって以上のような特性を備えるとき、芸術的経験・科学的経験等とまとまった「一つの経験」となる。

では、「一つの経験」でも「芸術的経験」と「科学的経験」とはどこが違うのか。それは、芸術と科学は経験を構成する素材が違うことである。芸術の素材は色や音等の質からなりこれで思考する。これに対し知的結論を持った科学的経験の素材は H₂O 等の符号や記号でありこれで思考する³。

芸術は、芸術の素材となる音・色・身体等の質的媒体と精神との相互作用による芸術的経験によって物質と精神とが融合統一したものである。これがデューイ芸術論の要点である。芸術は、日常経験に見いだされる「感覚的質」が素材となり、この物質としての素材と精神との相互作用によって理想化したものである。「感覚的質」とは、自然の事物とのかかわりにおいて我々が感覚で感受する色・音・味・匂い等を指す。例えば我々は、空の青色と海の青色の色の質感を区別できる。自然科学は、自然を量的なものとの質的なものを分けて質的なものには沈黙してきた。デューイは、17世紀の科学革命は自然の「直接的質」(immediate quality) (「感覚的質」) を無視することから始まったと述べている⁴。「感覚的質」は、近代の科学の対象から突き放され除外されてきたというのがデューイの見解である。そして、デューイは、自然の「感覚的質」の発展は芸術に結実すべきだと述べている⁵。

「感覚的質」は、芸術表現の素材となりまた媒体 (medium) となる。感覚的質が伴う雑音・調音は音楽の素材となり、またこれが媒体となる。感覚的質が伴う海の青色や空の青色の色彩は絵画の素材となり、またこれが媒体となる。芸術はこの自然の素材に伴う感覚的質の意味を音・色・身体・言葉等の媒体で表現する活動である。絵画の場合は、色という単独の媒体によって諸感覚で経験した感覚的質の意味を表現する。感覚的質は媒体を通して表現されるとき素材が組織・構成され、そこには芸術の形式と内容が生成され芸術の表現となる。形式は、素材を組織・構成した作品の外的側面を指す。内容は、素材を組織・構成した作品の内的側面を指す。つまり、内容とは素材に伴う感覚的質の意味が形式によって例えば「どっしりとした質」というように質として凝縮されたものを言う。

次にデューイは、芸術的経験においては、自己と環境との間の融合統一の喪失とその回復というリズム (rhythm) が機能していると言う⁶。例えば、彫刻家がノミとハンマーで外的素材とな

³ J. Dewey, *Art as Experience*, Capricorn Books, 1958 (1934) p.38. 鈴木康司訳『芸術論—経験としての芸術』春秋社、1969年、p.41.

⁴ J. Dewey, *Experience and Nature*, p.263. 帆足理一郎訳『経験と自然』p.202.

⁵ *ibid.* p.120. 帆足訳、p.100.

⁶ J. Dewey, *Art as Experience*, p.15. 鈴木訳、p.16.

る石を削り作品を制作するとき、イメージ・観察・記憶・感情の内的素材によって外的素材へ働きかけ、素材の変化に伴って内的素材も変化する。このように芸術的経験は内的素材と外的素材の相互作用の中で発展する。デューイは、この内的素材と外的素材との相互作用という繰り返しの過程で、我々が環境との融合統一を取り戻すことをリズムと言い、芸術的経験ではこのリズムの機能で外的素材だけでなく人間の内的素材も変化すると捉える⁷。またデューイは、このリズムの機能で内的素材と外的素材が融合統一する経験には「美的質」(esthetic quality) が伴い「一つの経験」となると言う⁸。

芸術作品は、芸術的経験におけるリズムの機能で自然の物質と精神との融合統一によって自然の物質と精神とが一体になったものである。芸術作品は、外界から受け取った「感覚的質」の意味を素材を通して芸術家の精神と融合統一させ、創り出されるものである。芸術作品は、芸術家が外界から受け取るものと、芸術家から働きかけることとの完全な相互浸透の中で達成される。従って、芸術作品は、自然の物質と精神とが融合統一されたものとなる。「一つの経験」としての芸術的経験は、このような自我と世界、すなわち、自然の物質と精神とが融合統一された経験と言える。

次にデューイは「美」(the beauty) をどのように捉えているのか。デューイは次の言説にあるように、自然の物質と精神とが理想の中で融合統一された経験を「美」(the esthetic) と捉えている。「有機体と環境とがそれぞれの姿を失って完全に一体となるような経験をこの両者が協力して築き上げる、その築き上げる程度だけ経験は美的となる」⁹。

一般に芸術の美 (the beauty) とは、対象となる作品の形、又は作品から受ける主体の快感のことを言う。デューイの「美」(the esthetic) の捉え方の特徴は、これとは異なり、我々の日常経験に美的質 (esthetic quality) の起源を認め、これが発展した芸術的経験において、物質と精神が融合統一されるものを美 (the esthetic) と捉えていることにある。

芸術的経験は、リズムの機能で自然の物質と人間の精神との融合統一を実現するもので、このような芸術的経験にデューイの哲学、すなわち、自然と精神は連続しているとみる自然主義的経験論の核心が現れていると言えよう。

Ⅲ 宗教論の特徴

デューイの宗教論の特徴は、「宗教」(a religion) と「宗教的なもの」(the religious) を区別し、「宗教的なもの」によって誰でも信仰、つまり人類共通の信仰の対象を提案していることである。「宗教」は、キリスト教などの特定の宗教を意味し、「宗教的なもの」は、経験がもつ「宗教的質」(the religious quality) で「経験の宗教的要素」(religious elements of experience) を意

⁷ *ibid.* p.74. 鈴木訳、p.81.

⁸ *ibid.* pp.54-55. 鈴木訳、pp.60-61.

⁹ *ibid.* p.249. 鈴木訳、p. 275.

味する¹⁰。つまり「宗教」は、特定の信仰と教義を持った団体を意味するのに対し、「宗教的なもの」は、いかなる制度や教義をも意味せず、人間が環境との相互作用において外的条件に「適応」(adjustment) するための「態度」(attitudes) を意味する¹¹。

「適応」としての宗教的態度は、包括的で全人格の変化であり、又その変化は人生を通じて持続するものである。このような「宗教的態度」には、次のような機能があるとする。宗教的態度を持つ人間は、想像力によって自我の調和的統一を目指して努力する。さらにこの自我の調和的統一は、想像力によって現実世界 (world) だけでなく宇宙 (the Universe) に対しても及び、自我と宇宙とが調和する状況をつくる。そして、「宗教的態度」を持った人間は、環境の中で全体的見通しを持って存在全体を持続的に変化させ自らも成長していく存在となる¹²。

では、「宗教的なもの」としての「宗教的態度」の「信仰」の対象は何か。それは、「理想目的」(ideal ends) と「理想価値」(ideal values) となる。デューイは、宗教論によって新しい「宗教」を提案しているのではなく、「理想目的」「理想価値」という新しい信仰の対象を提案しているのである¹³。この信仰の対象は、絶対的なものではなく反省的思考による経験によって実現可能な道徳的実践的なものである。ここにデューイの宗教論の特徴がある。高德忍は、「こうした誰にでもある人間の理想目的や理想価値を信仰の対象にしたことが、この著書のタイトルが“A Common Faith”となった理由であると考えられる¹⁴と述べている。

そして、デューイは、宗教的態度において信仰の対象となる「理想目的」や「理想価値」事例として次のことを挙げる。例えば、蒸気機関車はステューブソン以前には存在しなかった。しかし、そうしたものが実在することのための条件は、自然界の物質とエネルギーの中に、そして人間の能力の中に既にあった。人間は、想像力の働きによって、こうした現実にある事物を配列し直し、新しいものをつくる発想をしたのである¹⁵。デューイはこのような試みと同じことは、画家、音楽家、詩人、慈善家等にも当てはまると述べている¹⁶。ということは、例えば理想を求め活動する芸術家・科学者・教育者の経験にも本人に認識がなくても「経験の宗教的質」、即ち「宗教的態度」が伴っていると言えよう。

デューイが提案する「宗教的なもの」で期待したことは、社会のそれぞれの立場の人間がこのような理想目的・理想価値を求め活動することで、民主主義の社会を実現し社会を変えてゆくことにあったと言えよう。私は、このことがデューイの宗教論の著書『誰でも信仰』で期待したことではないかと思う。

¹⁰ J. Dewey, *A Common Faith*, L. W. vol.9. 1934. pp.8-9. 栗田修訳『人類の共通の信仰』晃洋書房、2011年、pp.14-15.

¹¹ *ibid.* p.12. 栗田訳、p.23.

¹² *ibid.* p.14-15. 栗田訳、pp.29-31.

¹³ *ibid.* p.30. 栗田訳、pp.64-65.

¹⁴ 高德忍『コモン・フェイス』(John Dewey *A Common Faith*) 拓殖書房新社、2016年、p.215.

¹⁵ J. Dewey, *A Common Faith*, pp.33-34. 栗田修訳『人類の共通の信仰』p.75.

¹⁶ *ibid.* p.34. 栗田訳、p.75.

最後にデューイは、「神」について、どう捉えていたのか。人間は、想像力によって現実条件との関連の中で理想を見出し、それを企画・実現することで現実を変化させてきた。そして、人間と人間社会は、想像力によってつくられた理想が成長することを促進し、この理想を実現することに協力する使命がある。このような「理想と現実が機能的に融合統一する働きは、高い精神的內容をもつすべての宗教において、神（God）の概念に事実上付与されてきた力とまったく同じものである」¹⁷。このような意味からデューイは、現実と理想との融合統一を表現するのに「神」（God）という語を使用してもよいと言っている¹⁸。デューイは、現実と理想が融合統一されたものを「神」という用語で表現しているのである。この「神」の概念は、既存の宗教のような絶対的な意味での「神」とは違い、我々の現実の日常経験とつながっている意味での「神」である。

デューイ宗教論の特徴は、宗教から超自然観を取り除いたこと、人間の日常経験から宗教を発想したこと、宗教の中心的機能は人間が理想目的・理想価値を追求することの3点に集約される。

IV 芸術論と宗教論の経験としての共通性

デューイの芸術論と宗教論の経験としての共通性は、次の4点となる。第1に両者とも美的質・宗教的質という質の経験である。第2に両者とも我々の日常経験を発展させ、想像力によって人間の理想を実現するものである。第3に美や神は、日常経験と切り離された絶対的世界に実在するものではなく、日常経験を想像力によって理想化することで、現実又は物質と理想とが融合統一されたものと捉えていることである。第4に芸術論も宗教論も人間の日常経験との関連で理論化することで、従来には無い新たな芸術論や宗教論を創出していることである。

参考文献

- (1) 西園芳信『質の経験としてのデューイ芸術的経験論と教育』風間書房、2015年。
- (2) 高木きよこ「デューイの宗教観」日本デューイ学会『紀要』第4号、1963年。
- (3) 行安茂「デューイの宗教論」日本デューイ学会『紀要』第24号、1983年。
- (4) 大久保正健「デューイにおける『宗教的なもの』」日本デューイ学会『紀要』第20号、1979年。
- (5) 杵淵俊夫「自然は『質』を帯びているというデューイの考え方について」日本デューイ学会『紀要』第32号、1991年。

¹⁷ *ibid.* p.35. 栗田訳、pp.79-80.

¹⁸ *ibid.* p.36. 栗田訳、p.81.